

HIRANO FUZAN

静岡ゆかりの作家の
全貌を紹介する
初の回顧展！



(公財)静岡市文化振興財団設立30周年記念事業
没後35周年記念

富山 平野 展



平野 中と
歩んだ
彩色木彫、
追求の軌跡



1. 平野富山《こだま》昭和時代初期～昭和30年代後半 木、彩色 個人蔵 / 2. 平野富山《福童子》昭和40年代前半～51年(1976)頃 木、彩色 静岡市 / 3. 平野富山《筒井筒》昭和40年代前半～51年(1976)頃 木、彩色 静岡市 / 4. 平野富山《羽衣舞》昭和58年(1983) 木、彩色 静岡市 / 5. 平野富山《瑞果喜猿》昭和52～平成元年(1977～89)頃 木、彩色 静岡市

2024
6/6 木
7/15 月祝

【プレスリリースのお問い合わせ】

展覧会担当：太田・高橋 広報担当：岡田・大庭

静岡市美術館 〒420-0852 静岡市葵区紺屋町17-1 葵タワー3F

SHIZUOKA CITY MUSEUM of ART tel. 054-273-1515 (代表) fax. 054-273-1518 www.shizubi.jp

(公財) 静岡市文化振興財団設立30周年記念事業

没後35周年記念

ひらのふざん 平野富山展

ひらくし でんちゅう さいしきもくちゅう
—平櫛田中と歩んだ彩色木彫、追求の軌跡—

■会期:2024年6月6日(木)ー7月15日(月・祝)【全35日間】

■休館日:毎週月曜日(ただし7月15日(月・祝)は開館)

■開館時間:10:00~19:00(入場は閉館の30分前まで)

■観覧料:一般1,300(1,100)円、大高生・70歳以上900(700)円、中学生以下無料

*()内は前売および当日に限り20名以上の団体料金 *障がい者手帳等をご持参の方および必要な付添の方原則1名は無料

前売券:4月16日(火)から6月5日(水)まで販売

静岡市美術館(窓口、オンラインチケット)、セブンチケット、ローソンチケット、チケットぴあ、谷島屋(パルシェ店、マークイズ静岡店、流通通り店)、MARUZEN & ジュンク堂書店新静岡店、戸田書店江尻台店

主催:静岡市、静岡市美術館 指定管理者(公財)静岡市文化振興財団

後援:静岡市教育委員会 協賛:清水銀行 助成:芸術文化振興基金



静岡県庵原郡江尻町(現・静岡市清水区江尻東)出身の平野富山(ひらのふざん,1911-89)は、日本近代彫刻史上、重要な彩色木彫家の一人です。人形師・池野哲仙(いけのてっせん,1880-1936)のもとで学んだ確かな彫技と彩色技術により、伝統的な主題から今日的な女性像まで、超絶技巧とも言うべき作品を生み出しました。また富山は彫刻家の齋藤素巖(さいとうそがん, 1889-1974)に師事して西洋彫刻も習得し、日展を中心に活躍します。さらには木彫界の巨匠・平櫛田中(ひらくしでんちゅう,1872-1979)に厚く信頼をおかれ、数多くの田中作品の彩色を手がけました。本展は平野富山の彩色木彫や西洋彫刻など約50点のほか、平櫛田中や関連作家らの作品約40点により、日本近代における人形、彩色木彫、西洋彫刻の三つの領域を横断し、彩色の専門家としても作家を支えた富山の仕事の全容に迫る初の試みです。

本展の見どころ

1. 当館だけの単独開催!静岡ゆかりの彩色木彫家、平野富山の仕事の全容を紹介する初の回顧展。

人形、彩色木彫、西洋彫刻の三つの領域を横断し、彩色の専門家としても作家を支えた富山の仕事を、初期から晩年までの代表作や貴重な資料とともに紹介。

2. しずび初、日本近代のオール彫刻展! 平櫛田中をはじめとする日本近代の彩色木彫の名品が登場。

没年齢は107歳、当時の男性長寿日本一でもあった日本近代木彫の巨匠・平櫛田中の名品の数々を紹介。豪華絢爛な《試作鏡獅子》、2mを超える大作《霊亀随》などが登場!



彩色木彫家・平野富山

*日本近代彫刻史上の平野富山の位置づけ…日本近代木彫の父・高村光雲(1852-1934)を第一世代とし、その門下生である日本近代木彫の巨匠・平櫛田中を第二世代とすると、平野富山は第三世代にあたる。田中と富山はいずれもはじめ人形師に学び、西洋彫刻も習得したという点に共通点がある。

会期中は能の上演、
専門家による講演会、
彩色実演&絵付け体験などを実施!

※詳細はHP・チラシをご覧ください。

第1章 彩色木彫を志す—「^{てっく}鑲国」時代

平野富山(本名富三)は明治44年(1911)、静岡県庵原郡江尻町(現・静岡市清水区江尻東)に生まれました。清水市江尻尋常高等小学校(現・静岡市立清水江尻小学校)を卒業すると、市内の指物所などで奉公します。富山はこの頃、関東大震災の影響により清水市に転居していた人形師・池野哲仙の知遇を得ます。「はじめは絵描きになりたかった」という富山は哲仙との出会いにより次第に彫刻を志し、哲仙が東京に出るとともに昭和3年(1928)に上京、彫刻と彩色の基礎を学びます。はじめ「富世」と号しますが、その後、師・哲仙の号「鑲寛」から一字を授かり「鑲国」と名乗りました。

富山は、哲仙のもとで確かな技術を習得して早熟した才能を発揮し、昭和12年(1937)からは人形研究団体・日本人形社に加わります。昭和16年(1941)で解散を迎えるまでの間、当時の人形界の気鋭らが集った同会において様々な表現に挑戦しました。

この章では、「鑲国」銘の平野富山の作品のほか、師・池野哲仙の作品を紹介しその影響関係を探ります。あわせて彩色木彫の先達らの作品も展示し、日本近代彫刻における彩色木彫の源流をたどります。

キーワード「日本人形社」

平田郷陽・岡本玉水といった当時の人形界の気鋭が牽引。人形研究団体・白澤会を前身とし、同会同人の弟子らを会員に迎えた。富山は昭和12年から加わった。

愛らしい稚児の姿の胡蝶舞



ベルギー 露西の会により開催された
開展記念に出品した
日本人形社合作の
うち、富山は本作
を担当

故郷の清水にゆかりのある
能楽「羽衣」が主題



日本人形社展出品作と同型(または複製)
歌舞伎の演目「本朝廿四孝」に
登場する姫



キーワード「彩色木彫」

彫刻した木地に下処理を行い、岩絵の具などの日本画絵具で彩色したもの。やに止めにもなる下塗りは胡粉に膠を混ぜたものを基本とするが、生漆を塗り金箔や銀箔押しを行った上から彩色することもある。淡彩・濃彩仕上げがある。

日本近代における彩色木彫の先達たち



奈良一刀彫の中興の祖で、正倉院宝物などの模刻に従事し、古美術にも精通。神鹿の絵画や木彫も多く制作。後進に大きな影響を与えた。

職人から彫刻家への
過渡的存在・森川杜園



法隆寺夢殿を岡倉天心、フェノロサとともに開扉するなど古美術研究にも力を注いだ彫刻家。一時東京美術学校の初代教官を務めた。

池野哲仙の師・加納鉄哉



人形研究団体の先駆け・白澤会に属し、昭和はじめの人形芸術運動の一翼を担った人形師。彩色技術を平柳田中から高く評価された。

富山の師・池野哲仙

1. 平野富山《舞人(稚児雛のうち)》昭和時代初期 木、彩色 静岡市/2. 平野富山《おぼろ夜》昭和14年(1939)頃 木、彩色 静岡市/3. 平野富山《羽衣》昭和時代初期 木、彩色 静岡市/4. 平野富山《八重垣姫》昭和13年(1938)頃~昭和30年代後半 木、彩色 静岡市/5. 森川杜園《雄鹿》制作年不詳 木、彩色 小平市平柳田中彫刻美術館/6. 加納鉄哉《羅陵王像》大正3年(1914) 木、彩色 岐阜市歴史博物館寄託/7. 池野哲仙《蘭陵王舞》昭和4~8年(1929~33)頃 木、彩色 静岡市

第2章 西洋彫刻の仕事と平櫛田中との歩み—「敬吉」時代けいきち

平野富山と平櫛田中との出会いは、昭和5、6年頃に富山の師・池野哲仙のもとを田中が訪ね、彩色を依頼したことに始まります。すでに西洋彫刻を踏まえた迫真的な人体表現による木彫が高く評価され日本美術院を中心に活躍していた田中でしたが、神社奉納品の依頼制作をきっかけに彩色した肖像彫刻に傾倒していきます。昭和11年(1936)、池野哲仙が死去したことを受けて25歳の富山が彩色の仕事を引き継ぎます。作品に対し一切の妥協を許さない田中と、それに食らいつき腕を磨く富山との約半世紀におよぶ関係の始まりでした。

いっぽう富山は、良い彩色をするには彫刻を知るとよいと田中より助言され、昭和16年(1941)に構造社研究所に入所し彫刻家・齋藤素巖から西洋彫刻を学びます。上達は早く翌年の第15回構造社展に「敬吉」銘で初出品、同年第5回新文展で初入選を果たします。その後特選を2度受賞し日展(新文展の後身、日本美術展覧会の略称)会員となるなど同展を中心に活動を続け、彩色木彫と同様に生涯の仕事となりました。

この章では、「敬吉」と名乗った時代の平野富山の三つの仕事、すなわち西洋彫刻の仕事、田中の彩色担当者としての仕事、そして自身の彩色木彫の展開を追います。

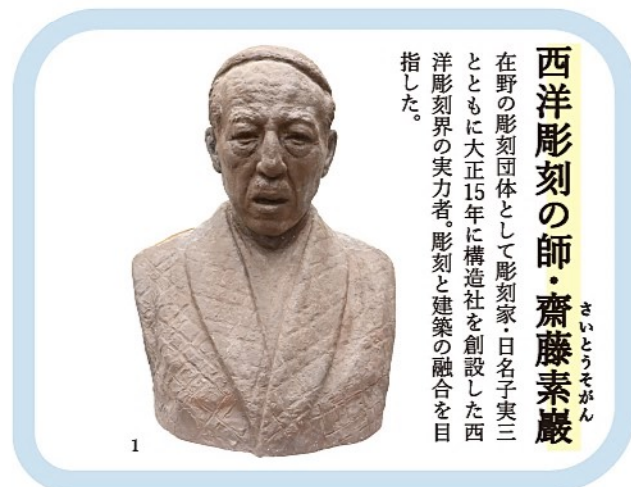
第一節 西洋彫刻の仕事



富山初の日展特選受賞作！
約180cmの等身作品



ダイナミックな動作や量感表現に
こだわった日展入選作



西洋彫刻の師・齋藤素巖さいとうそがん
在野の彫刻団体として彫刻家・日名子実三とともに大正15年に構造社を創設した西洋彫刻界の実力者。彫刻と建築の融合を目指した。

キーワード「西洋彫刻(塑造・塑像)」

塑造とは明治期になり西洋から導入された彫刻技法。油土を用い心棒に肉付けしてできた像を塑像と呼ぶ。耐久性を持たせるため石膏取りしたものが展覧会出品作となるのが通例。これがブロンズ化などを行う際の型となり石膏原型と呼ぶ。石膏原型は作家が直接手を加えた塑像に最も近いものとして重視される。*本展では塑像・石膏像・ブロンズ像といった西洋由来の技法による作品を総称して西洋彫刻と定義。

第三節 彩色木彫の展開



4



5

キーワード「白鳳会」

日本人形社解散を受け、同会の川上南甫を中心に昭和16年に発足した人形研究団体。富山も当初から在籍。西洋彫刻では昭和17年より「敬吉」銘を使用し田中作品の彩色でも敬吉を名乗った富山だが、白鳳会出品(昭和36年頃まで)では「鎮国」銘を使用。彩色木彫において敬吉を名乗った現時点での明確な記録は昭和44年の寺院奉納品から。



6

若い男女の恋心を表した
伊勢物語「筒井筒」より

第二節 平櫛田中の彩色担当者として

富山が彩色をすべて行った
最初の作品と同型



1

顔は日本画家・前田青邨
その他は富山による彩色
田中の彩色木彫第1作と
同型の第3作



2

日本近代木彫の巨匠・平櫛田中
ひらくしでんちゅう
はじめ人形師に師事、その後日本近代木彫の父・高村光雲の門下生となる。日本美術院を中心に活躍し、東京美術学校(現・東京藝術大学)教授も務めた。



3



4



5

全長約2m!昭和天皇のご養育係
も務めた浅野長勲の肖像彫刻



6

田中が敬愛した
森川杜園の作を参照

キーワード「杜園の影響」

近代の木彫家に多大な影響を与えた森川杜園。中でも田中は明治以降の優れた彫刻家とは問われ「一に竹内久一。二がなくて三が森川杜園」と答えたように杜園を敬愛した。作品を参照し、模刻も手がけた。

ほしとりほう
キーワード「星取法」

田中と同門の木彫家・米原雲海らが西洋より導入された技法を木彫に応用した方法。油土で像をつくり、石膏取りした形を星取機という器具で木に転写。写し取られた無数の点(星)を頼りに、固定された星取機の針が止まる深さまで彫り進めていく。田中や富山もこの技法で制作した。星取法により同型の制作が可能となった。



7

かがみじし
キーワード「鏡獅子への道」

《鏡獅子》(東京国立近代美術館蔵)は、約20年余りを要した田中の代表作。歌舞伎舞踊「春興鏡獅子」を演じた六代目尾上菊五郎がモデル。富山も昭和11年の着手当初より田中とともに研究を重ねた。幾度の試作を経て昭和33年に2mを超える大作《鏡獅子》が完成。本作胎内に「彩色 平野敬吉」と墨で署名した。



10



8



9

日本近代彫刻の金字塔
《鏡獅子》の試作



11

1. 平櫛田中《平安老母》昭和11年(1936) 木、彩色 東京藝術大学 / 2. 平櫛田中《源頼朝像》昭和9年(1934) 木、彩色 東京藝術大学 / 3. 平櫛田中《遠き思ひ》大正5年(1916) 木 東京藝術大学 / 4. 平櫛田中《雲亀随》昭和11年(1936) 木 小平市平櫛田中彫刻美術館 / 5. 平櫛田中《雲亀随》昭和11年(1936) ※彩色は後年 木、彩色 日本芸術院※文化庁許可済 / 6. 平櫛田中《楠公》制作年不詳 木、彩色 小平市平櫛田中彫刻美術館 / 7. 平櫛田中《試作鏡獅子頭》昭和13/34年(1938/59) ブロンズ、金箔、彩色 井原市立平櫛田中美術館 / 8. 平櫛田中《鏡獅子試作裸形》昭和13年(1938) 木、彩色 早稲田大学坪内博士記念演劇博物館 / 9. 平櫛田中《試作鏡獅子》昭和20年(1945) 木、彩色 株式会社歌舞伎座 / 10. 平櫛田中と平野富山 / 11. 《鏡獅子》の彩色をする平野富山 ※10, 11小平市平櫛田中彫刻美術館より提供

第3章 彩色木彫家・平野富山

昭和52年(1977)、富山は号を「富山」と改めます。この頃には平櫛田中からの彩色の仕事も区切りがつき、作家としての円熟期を迎えます。昭和47年(1972)の初個展以来、毎年展覧会を開催して能楽・歌舞伎・神仏といった伝統的な主題に取り組むいっぽう、日展等へ出品した作品を彩色木彫としても制作するなど、伝統的な彩色木彫で現代的表現を試みた独自の世界を展開します。また西洋彫刻においては日展・日彫展(日本彫刻会展の略称)・太平洋展(太平洋美術会展の略称)に長年出品を続け、昭和57年(1982)には日展評議員にも選出されます。晩年は病と闘いながらも社寺への奉納品といった大型作品にも取り組み、亡くなる直前まで精力的に制作を続けました。田中とともに、そして自らの彩色木彫を生涯かけて追求した富山。その足取りは日本近代彫刻史の中に確かに刻まれています。

◎伝統的主题—能楽、歌舞伎、神仏



故・中曾根元総理も同型を手元においたという聖徳太子二歳の像

1



2



5



6

◎現代の女性像

キーワード「平野富山後援会」

昭和58年4月に発足した総勢600名を超える会。会長は清水銀行の当時の頭取・佐々木哲雄氏。同年3月には佐々木氏の音頭で清水銀行・静岡銀行・駿河銀行の3行で本作が共同購入され、清水市新庁舎落成記念として同市に寄贈された。後援会理事に富山の尋常高等小学校時代の同窓生の集まり「茂亥会」の中心人物も名を連ねる。彼らは富山を地元清水で紹介しようと行動を起こした最初のメンバーで、富山の終生の友だった。

彫刻・彩色技術を駆使した今日的な女性像の傑作



3



4



7

キーワード「社寺奉納品」

全国各地の社寺に奉納された富山の代表的な彩色木彫に高野山福智院蔵の《孔雀明王》、川崎大師平間寺蔵の《稚児大師像》、そして寒川神社の《神馬》《猿》などがある。同神社内の神馬舎に奉られた像は、猿が神馬の手綱を執る姿で表わされるが、本作では御幣を手にした像となっている。